

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nskkn.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



《シリーズ・宣教協議会の提言から その④》

コイノニア

― イエス・キリストの交わり ―

司祭 アンデレ 橋本 克也

「心を高くあげよ」というテーマで行われた教区成立90周年の感謝記念礼拝では、「わたしたちが一つになり、心を新たにし、主に仕え、この世界にみ国の正義と平和を実現していくことができませうように」と心を合わせて祈りました。イエスさまは、周囲から、「罪人だ」と敬遠されたり、排除されていた人々に近づき、受け入れて、その一人ひとりを癒されました。また現在、自分自身を受け入れられないで、悩み苦しんでいる人に「あなたこそ神の大切な存在なのだ」と癒され、「悩み苦しんでいるあなたの隣人も、同じように神の大切な存在なのだ」と、癒し、祝福される主です。

昨年9月に行われた日本聖公会宣教協議会は、「信徒の減少・高齢化、聖職者の不足、教会建物の老朽化、財政の逼迫」などの日本聖公会の抱える厳しい現状を受け止めながら、「いのち、尊厳限りないもの―宣教する共同体のありようをもとめて―」というテーマをもって開催されました。宣教協議会でまとめられた、宣教・牧会の十年の提言では、①神の国の福音を宣言すること、②新たな信徒を、教え、洗礼を授け、養うこと、③愛の奉仕によって人間の必要に応えること、④社会の不正義な構造の変



革に参与すること、⑤被造物の完全さを守り、地上の命を保持し、新たにすため努力すること、のアングリカンコミュニティ(交わり)の宣教の5指標が再確認されました。それはまた、聖公会が大切にしてきた教会の5つの要素、

宣教(ケリユグマ)
奉仕(ディアコニア)
証し(マルトウリア)
礼拝(レイトウルギア)
交わり(コイノニア)
の、確認でもありました。教会は、イエス・キリストのコイノニアと言われます。

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。(Ⅱコリント13・13)この交わりは、祈りの交わりであり、また聖餐式によって見出される交わりです。「神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに

招き入れられたのです。(Ⅰコリント1・9)教会は、すべての人の居場所・出会いの場であり、一人ひとりの存在を尊重し共に歩む交わりの場です。一人ひとりが福音宣教の担い手として招かれていきます。教会の交わりは、人の尊厳を侵害したり傷つけたりするさまざまな偏見や差別からの解放をめざしています。それは、あらゆるハラスメントを許さず、その防止に取り組むことを宣言している交わりです。「いのち」そしてその「尊厳」を脅かす出来事や、新たな働きと力への誘惑は絶えることがありません。社会の中で、弱い立場や、小さくされている人の、声と心に深く耳を傾け、思いを沿わせられる交わりを実感できる教区、教会を目指して行きましょう。「一つになり、心を新たにし、主に仕え、この世界にみ国の正義と平和を実現していくことができませうように」と私たちは祈り歩みます。

東京教区成立90周年 2013フェスティバル特集

9月23日、香蘭女学校を会場に「心を高くあげよ」として記念礼拝とバザール、うたごえフェスタなどのイベントが行われた。当日集まった人は約1000人、台風が過ぎ涼しくなった秋の一日を楽しんでいた。



―礼拝説教―
導かれた90年、そして

司祭 卓 志雄

まず90年間、東京教区を導いてくださった神様のみ恵みと信仰の先達の働きに対して感謝をささげます。私たち東京教区は1923年5月17日、イエス・キリストを船のマストとして出航しました。また日本聖公会初の日本人主教として選ばれた元田作之進主教は東京教区という船の船長となりました。このように始まった船出は必ずしも順調とは言えない状況でした。同年9月1日関東大震災が起こり、多くの教会が焼失しました。しかし、その状況の中でも航海をやめることはありませんでした。今年7月発行された「教区時報コミュニティオン」を通して山

口司祭がご紹介してくださった記事を思い出して下さい。当時北東京地方の監督マキム主教が米本国に送った「凡ては失せたり、残るは主にある信仰のみ」という電報を通して、灰燼の中から、主は必ず立ち上がらせてくださると、主が照らされる光を仰ぎみた東京教区の姿が分かります。しかし出港直後から激しい嵐に遭った航海は険しい道のりの連続でした。昭和になつてからは軍国主義、国家主義による厳しい弾圧の中で「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」、「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」という主の掟をきちんと守ることはできませんでした。教会が、イエス・キリストを固く信じ、預言者としての信仰に立って、「この世の不正を覆すこと」に向けて一致団結して苦難と試練を乗り越えようとしたのかどうか、教会の使命を十分に果たし得たのかどうか、謙虚に省みることが今、私たちに求められています。

ことに満足していただけないか、また航海のために絶対必要な乗組員、すなわち聖職、教会の働きに必要な人々を積極的に育てようとしたのかどうか。そして船を動かす燃料、すなわち献金や目に見える教会の働きに対する支えを十分に補充しようとしたのかどうか、むしろ神の国に向かって進む船の進路を妨害したのではないかと、謙虚に省みてから航海を進めなければいけません。

しかし今までの歩みを謙虚に省みる私たちに対して神様は叱責ばかりではなく、励ましと称賛と勇気を与えて下さいます。十分とは言えないかもしれないけれど「よくやってきたよ!」と。この東京に福音を宣べ伝えてきた東京教区の働きは過小評価されてもいけないと思います。教区成立90周年を迎えて発行された「東京教区90年の歩み」に載っている各教会・礼拝堂、東京教区につらなる学校、施設の過去と現在の写真と説明、また年表をゆっくりご覧下さい。神様のみ恵みと導き、信仰の先達の涙と血、また今を生きている私たちの働きは、この地において世の光と塩の役割を担ってきたことが分かります。「あなたがたは行って、全ての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を

授け、あなたがたに命じておいたことを全て守るように教えなさい。」という主の命令に従ってきました。東京教区の働きによって大勢の人々が主に出会い励まされ、勇気づけられ、力づけられ、生かされています。そして主によって生まれ変わった私たちは今、ここに集まり信仰の仲間たちと感謝と賛美の礼拝、主にあつての交わりを分かち合っています。

これからも私たちは航海を続けなければなりません。航海を続けようとする私たちに、イエス様は今日の福音書を通して最後の遺言のように語っておられます。イエス様の死を目撃した弟子たちは非常に恐れ、イエス様の昇天を目の前にして何をどうすればいいか分からなくなっていました。あらゆる試練と苦難の中でも常に共におられ、励ましと力と勇気を与えてくださった復活のイエス様に再会したばかりなのに、弟子たちは再びイエス様の「不在」に対して不安と恐れを感じました。そのような弟子たちにイエス様は「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」との約束をされてから天に昇られます。10日後、その約束は成し遂げられ聖霊の降臨により弟子たちはあらゆる迫害に対して屈することなく堂々と福音を宣べ伝え

始めました。イエス様が十字架で死なれた時、逃げまどった弱虫たちは、殉教までも怖がらずにイエス様を救い主だと告白し宣べ伝えました。そして聖霊は日本のキリスト教を、日本聖公会を、東京教区をも導いて下さいました。

聖霊の導きに感謝し100周年に向けて歩み出そうとする私たちは、信徒の高齢化、聖職の減少、財政の逼迫等の課題を乗り越えて歩まなければなりません。全てが重荷だと思ひ、不安と心配、恐れを感じているかもしれせん。しかし恐れることはありません。主はかつておられ、



今おられ、これからも共におられます。私たちがやらなければならぬことは「あなたがたは行って、全ての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことを全て守るように教えなさい。」という主の命令を忠実に守り「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」という主のみ言葉

を固く信頼することです。そして「心を高くあげる」ことです。感謝聖別の最初に司祭が唱える「心を神に」という言葉は、地上のものに心引かれる思いを静め、主のみ旨にかなう心を高くあげ、上にある本當の命を祈り求めることです。「上にあるもの」に心を留めることによって、地上において本當の命を生きる事ができるという意味です。私たちは東京教区の現状という「地上のもの」に心を引かれ不安と心配、恐れを感じ、それらを自分たちの力と知恵だけに頼って乗り越えようとしていますが、主に寄りなればみ旨にかなうことはできません。神様に向

て両手と心を高くあげ、不安、心配、恐れを乗り越えられるように、力と勇気と知恵が与えられるように祈り求めましょう。「主のみ」に頼りましょう。地上のものにとらわれた思いは感謝と賛美の心に変えられ、私たちはこの世、ことに東京の地に主の福音を宣べ伝える「真の器」になることができますと確信します。

を軸としたコマは回り始め、今は大畑主教を軸として遠心力を生かして神の国の拡張のために回っています。コマが倒れそうになった時もありました。しかし神様のみ守りによって90年も倒れることなく回っています。しかも東京教区のコマは綺麗な姿で回っています。回っていないコマには様々な色や違う模様が描いてあり調和しているようには見えません。まるで私たちそれぞれが違う思い、形をしているのと同じようです。しかしコマを回すとその模様や色が混ざって幻想的に美しく見えます。まさに「私たちは多くいても一つの体です。」の実現です。神様は一つとなって鮮やかで綺麗な姿を見せている東京教区というコマをこれから倒れないようにみ守って下さいませ。これからもコマはそれぞれが違っていても鮮やかで綺麗な姿を見せながら回り続けます。私たちの務めは主教という軸を中心として強い遠心力をもつて東京教区というコマの回転を保ち、この世に神の国を拡張していくことです。

教区成立90周年を迎えて主に全てを委ねながら、心と手を合わせて100周年に向けて歩んで行くとする東京教区の上に神様の豊かな祝福と導きを与えられますように祈ります。

(宣教主事・練馬聖カプリエル教会牧師)

フェスティバル・レポート



開会礼拝「聖餐式」

聖餐式は10時30分開会、司式・大畑主教、説教・卓志雄司祭（説教報告欄・2、3頁参照）のもと執り行われた。チャイムとオルガン奏楽に続きフェスティバル・クワイヤーによる聖歌242番（お招きください）主よ）奉唱、参入歌・聖歌238番（今いますみ救いの主よ）を謳いつつ70人の子どもたちがロウソクを手

にプロセSSIONの先頭を歩む。90個の灯火は礼拝堂を飾る光のオーナメント、「これまで」の歩みと恵への感謝と賛美を表し、「いま」共に一つとなるしるし。旧約列王記上19・13b～15b、詩編第116編9～14、使徒書コロサイの信徒への手紙3・1～4の朗読、続く聖職団による聖歌568番の奉唱の後、マタイによる福音書28・16～20がこの記念礼拝に主のみ恵を証する。

記念礼拝を憶えて編まれた代祷と共同懺悔、「主の平和」の挨拶、感謝のうち



に陪餐に与かる。アンセム3曲（フェスティバル・クワイヤーと子どもクワイヤー&リコーダー）奉唱、陪餐歌・聖歌472番（ここに祈りの家がある）に思いを深め強められる。感謝の祈りを捧げ、終わりに大畑主教により祝福が唱えられ、「これから」へと心新たにされた。

記念誌の発行

「東京教区90年のあゆみ」

東京教区成立90周年を記念する63ページ、色刷りの立派な記念誌が、フェスティバルの開催と共に発行された。大畑喜道主教のメッセージに始まり、東京教区教会一覧、学校・諸施設一覧、1846年沖繩への聖公会伝道に始まり2013年に至る東京教区歴史年表、現存しない教区史上の教会一覧と、盛りだくさんで、教区の歴史を知る上で欠かせない内容が詰まったものである。



現在の各教会の一覧は、

それぞれ教会の昔と今の写真と共に、教会員自身による紹介が書かれていて、各教会の特徴を知るのに欠かせない読み物でもある。東京教区歴史年表は、長年歴史文献を集めてこられた諫山禎一郎氏が近年編纂されたものに、記念誌部会の前田良彦司祭、鈴木一氏、鈴木慰氏、福永澄氏がそれぞれ資料を加え、またフェスティバル実行委員長の山口千壽司祭も加筆されたとうかがったが、まさに網羅的な年表といえる。それが

同時代の世の中の出来事と対比して書かれていることで、教会の動きも世の中と関係が深かったことを理解させられる。

大盛況のバザール

礼拝後、子どもたちが紙で作った黄色い花を持って退堂し、その花を大きく作ったロゴマークの「90」のところに貼り付けた。そのマークをバックに聖職者たちが十字架の形に並び、さらに参加者がそれを囲んで記念撮影、そして主教の開会宣言の後、12時30分にバザールが開始された。

快晴ではないが、ほどよい気候の中、香蘭女学校の校庭いっぱい54もの出店や展示のブースが並び、それぞれ工夫をこらした出店は、カレー、赤飯、ホットドッグ、焼きそばなどのお弁当をはじめケーキ、クッキー、コーヒー、お抹茶や手芸品、エルサレムの十字架といったさまざまなグッズ

ズとバラエティに富んでいた。それぞれ売れ行きも順調だったようで、お弁当などは開始30分程で売り切れたところもあった。



また、賑やかな仲間が集まる中高生のブースでは、夏に行われたキャンプの報告を展示、校庭の中間には子どもコーナーがあり、射的・輪投げ・釣りゲームを多くの子どもたちが楽しんでいました。

この時に久しぶりに会う仲間たちも多く、あちこちで交わされる挨拶と笑顔、これこそがフェスティバルの楽しみの一つであり、う

たごえフェスタから聞こえる歌声はお祭り気分を盛り上げていた。大盛況のうちに14時30分にバザールは終了し、閉会礼拝へと移っていった。

うたごえフェスタ

午後のプログラム開始後ほどなく、屋外のバザール会場の一面に設けられた舞台らしきところで始まったのがうたごえフェスタ。

司会者の説明によるとこの「うたごえ」という名はかつて流行った「うたごえ



喫茶」からとったとのこと。

ここでは歌をうたう時にはリーダーがいたそうで、早速、歌を知っている方々が引っ張り出されていた。歌は全部で11曲、子どもたちの歌う聖歌「おおなみのよるに」から始まり、「上を向いて歩こう」「およげ！たいやきくん」「北酒場」などおなじみの曲が続ぎ、そして今最も良く歌われている曲の一つ、聖職たちが歌う「花は咲く」までバラエティーに富んでいた。ふけゆく秋の夜が始まる

「旅愁」は、知っているわと張り切って歌いだしたもののキーが高過ぎて音が出せない方が続出。キーボードの演奏者に低くしてもらいシーンもあり、苦笑いの一コマだった。

「東京音頭」では傘をさしながら声を張り上げる熱狂的なヤクルトファンに交じって大畑主教の姿も。主教さんはヤクルトファン？

閉会礼拝・夕の祈り

次の10年を託された若人、子どもたち・信徒たちの奉仕による夕の祈りを捧げる。

聖歌38番に続く詩編を奉じた後、聖壇上の灯火オーナメントに夫々91個目と92個目のろうそくを置く。次に黙想（聖書朗読、黙想の導き、聖歌）Ⅰ〜Ⅲを重ねながら、これからの10年・100周年を目指し10個のろうそくを加える。

この黙想Ⅰ〜Ⅲは、「過去」・「現在」・「未来」の3

部から成り、ろうそくは最終節目の主の祈りに続く99個目、そして祝福の後に100個目が灯された。その直後、聖壇背後のスクリーンに、本フェスティバルのロゴへ教区成立90周年「心を高くあげよ」を重ね合せ「nex100」が映し出され、次の100周年に向け新たな歩みが示され、子どもを抱いた朴司祭、成司祭ご夫妻が派遣の祈りを唱え、今年のフェスティバルは厳かに終了した。



「夏の中高校生キャンプを振り返って」

主の平和。今年、教区の青年活動として新たに「中高校生キャンプ準備会」がスタートをきりました。聖書研究やハイキング、キャンプファイアーなどたくさんさんの経験をしてとても素敵なものになった夏のキャンプの思い出を、皆さんにご紹介します。

今回のキャンプは、8月19日から22日の4日間、長野県湯の丸高原にあるシャロームロッジで行いました。参加者のみんなが打ち解け始めた初日の夜、少人数のグループに分かれ「死ぬまでにしたい10のこと」というテーマで分かち合いを行いました。様々な意見がでた中でよくに印象に残っているのは、「友達とこの先もずっと仲良くしたい」というものです。とても大切だけど実は大人になるにつれてどんどん難しくなるテーマだと感じ、それと同時にこのキャンプで出会った仲間も、みんなにとっても仲良くしていききたい仲間になれば素敵だな

と思いをしました。

来年も、またみんなと再会し、そして新たな仲間と出会えることを楽しみにしています。

聖アンデレ教会 鈴木みのり

日曜学校連絡会第2回

「合同子どもキャンプ」

ことのほか暑かった夏の日、教区内18教会から、小学生とスタッフ計44人を乗せたバスが保護者や司祭様に見送られ



新宿から清里に向けて出発。昨年参加の顔も混じっているがゲームに興じつつも互いに様子見の車中スタート。

各教会では少人数のため実施できない教区内のSSキャンプ事情に、子ども達に何とか楽しさの体験と担当者に助けを、と連絡会が温めてきた企画を実現させて2夏目。キャンプスタッフを広く募り5人の新メンバーと共に準備を重ねる。子ども達は保護者を離れスタッフは普段の様子が見えていない分子ども達に緊張を持ち、互い探る信頼関係の上に良いものを形作っていく事が出来たと思う。半日もすると子ども達の力は大人の想いを上まわる。祈り、食し、

渓谷歩き、キャンプファイヤー、入浴、眠り、を通していつの間にか共同生活が出来上がっている。大人は準備万端整え後は見守るだけと悟り、それを喜び合えるうれしさ。無事が守られ、物心共にお支え頂いた教会や教会、お祈りに感謝。教区フェスタと一緒に歌って笛を吹こう！と再会を約した暑い夏。SS連絡会スタッフ 今井信子 聖マーガレット教会

「司祭のしぐさ」

『思いやりの心 江戸しぐさ』

越川禮子 監修

池田葉子 編者・絵

マガジンハウス2013年刊

司祭 高橋 顕

本書は、江戸時代の江戸の町に生きる人々の素敵なしぐさが多く記されている。これらのしぐさは、現代に生きる私たちにも躰や心掛けとして伝わってきているものもあるが、人付き合



も言える「往来しぐさ」があった。まずは『肩引き』。すれちがう者同士がお互いに肩や腕を後ろに引いて、お互いがぶつからないようにする。また『七三歩き』があった。道路の端の三割を自分が歩き、七割は急ぎの人や荷を運ぶ車に道を譲った。『蟹歩き』というものもある。幅の狭い路地を行き交う時はお互いに体を横にして蟹のように歩き、思いやり合う。そして『傘かしげ』。雨や雪の日に傘をもつてすれちがう時、お互いの傘がぶつからないように、またお互いが濡れないように、お互いの傘を外側にスツとかしげで斜めにして通る。江戸のしぐさは、マナーという以前に、思いやりの心そのものであった。

昔も今も、人間一人で生きるということはある。身内の人同士、仲間同士、世間で出会う人同士が、しても、されても、見ても気持ち良い、いきで素敵なしぐさが、江戸しぐさで、これらのしぐさは、現代に生きる私たちも実行できる。江戸でもかつて、お互いが道路ですれちがう時の挨拶と人が共に生きる豊かさとして江戸のおおらかさである。

ようこそ東京諸聖徒教会へ



ヨーロッパの大聖堂では、聖書の物語をテーマにした聖画が数多く見られますが、日本の教会ではあまり見られません。東京諸聖徒教会は、一人の画家による聖画の連作が見られる日本では珍しい教会です。

聖画の作者は、当教会信徒の郡山正さん（元女子美術大学教授）。郡山さんは、かつて諸聖徒教会に学生寮があった時代、そこで青春期を過ごされた一人です。「諸聖徒教会に学生寮？」と思われる方も多いでしょうが、130年以上になる教会の歴史はなかなか複雑です。

1881年、米国宣教師のE・R・ウッドマン師により、麹町区飯田町に「九段聖公会講義所」が開設され、1896年に「諸聖徒教会」と命名されました。信徒の増加に伴い1907年には神田西小川町に移転。1918年に、男子学生寮「諸聖徒



寮」が設立されます。ところが、1923年の関東大震災で教会堂が崩壊。翌年の1924年に小石川区林町（現在地）へ移り、大塚聖公会と合併して「東京諸聖徒教会」となりました。

1931年に新しい聖堂、会館、牧師館が完成し、「諸聖徒寮」も再開。1933年には「諸聖徒幼稚園」が開設されます。し

かし、1945年の東京大空襲により、建物のほとんどを失います。

戦後は、廃墟となった建物を修復・復興し、1958年から幼稚園を再開。学生寮は一時女子学生寮として復活しますが、その後閉鎖され、現在に至っています。

諸聖徒教会の一週間はと

いうと、月曜日から金曜日までは、幼稚園のこどもたちの元気な声が響き、日曜日の朝は、近年活発化している日曜学校のこどもたちが活躍。そして、礼拝後の愛餐会は、多世代の信徒のコミュニケーションの場となっています。実に幅広い年齢層が入り込んでいる諸聖徒教会ですが、そんな皆が一つになるのは、教会と幼稚園が合同でやる、秋の「しよせいとバザー」です。園児のお父さんやお母さんの若いパワーに助けられながら、毎年、楽しい働きの時間を与えられています。

残念ながら、建物・施設の老朽化のため、幼稚園は2015年の3月で休園することが決まっています。長い歴史を振り返ると、震災や空襲といった困難の中から立ち上がったきた諸先輩の姿が見えてきます。現代の困難に直面している私たちも、挫けずに、未来志向でありたいと願います。

信徒 金木 幸史

《信徒リレーエッセイ》

教会と私

小金井聖公会

倉敷 信

日曜日になると教会に出かけることが、習慣になっている。一体何がそうさせてきたのか。学生時代は教会の青年会活動が私を教会に惹きつけていたように思う。青年会で夜通し議論したこともあった。聖歌隊で歌う楽しさ故に教会を休むことがなかった時代もあった。年齢が進み、30代も後半になる頃からはなかったろうか。教会の内なるものに心を向けるようになったのは。

祈りのことばについて考える。キリストの福音について学ぶ。時に何かに躓くこともあったが、そうしたときにも早禱式の礼拝で歌われていた詩95篇「いざ我ら主に向かいて歌い・・・」は、私の足を教会へと向かわせた。そして今は、礼拝の中で皆で唱える「主よ、我が罪を赦し給え」「主よ、憐み給え」の祈りに、心の安らぎを憶える私である。

第58回GFS全国研修会

核のない世界をめざして

東京教区GFS

水谷 治子

第58回GFS全国研修会は、7月26日から28日までの3日間、ナザレ修女会を会場として行われました。猛暑の中、全国から34名の参加者を得て、静かな修道院で祈りと交わりの時を待たせたことを感謝しています。

GFSでは、毎年、各教区GFSが回り持ちで研修会を開きます。今年は東京がその当番で、テーマを「核のない世界をめざして」としました。これは、2年前、GFS世界祈祷日礼拝式文を、日本GFSが作成したとき掲げたテーマでもありました。

開会礼拝は、この式文を用い神崎雄二チャプレンの司式で行われました。大畑喜道主教から、「小さい光でも闇を照らすことができる」というメッセージを説教の中で頂き、私たちは小さな群れでも、希望を持っていきたい、と勇気づけられました。

初日の講演は、福島聖ステパノ教会の信徒、西間木美恵子さんのお話で始まりました。あの東日本大震災と、それに続く福島原発事故によって、生活と健康の不安に今も、これからも脅かされる福島の方々のことを思

い、胸が痛みました。抑え気味の口調から、福島原発事故への怒りが感じられました。

次の講演は、福島から東京へ避難している母子への支援活動「つきしまキッズデイ」について、チャプレンから報告がありました。月島聖公会



で行われている、この活動にGFSはお茶コナーとして参加し、手作りのケーキとコーヒーマスタードを準備しています。先生など、実にたくさんボランティアによって支えられています。放射線の子どもへの影響を考えて、お父さんは

福島で働き、お母さんと子どもたちは東京に避難する、という別居生活で、精神的にも経済的にも辛い思いをしている方々にとって、1カ月に1回のこの活動は、くつろげる場所のようです。小さな教会でも、神様は用いてくださる、というお話が心に響きました。

立場にたって活動する必要がある、ということをも具体的な例をあげてお話になりました。その日の夜は修道院のチャペルで海宝良子さん達の、すばらしいパイプオルガンの演奏があり、疲れた頭を癒してくれました。

3日目の閉会礼拝は沖繩の知花阿佐子さんの司式で閉会礼拝をし、この研修会を無事に終えることができました。

今回の研修会では、嬉しいことがありました。それは、月島聖公会のGFSの子どもたちが、この研修会に来てくれたことです。震災支援をしてくれた世界GFSの人たちにお礼のプレゼントをしよう、というリーダーの呼びかけでクラフトをしたり、また、子ども向けにチャプレンから原子力発電の問題についてのお話を聞きました。

2日目には、基調講演として、日本キリスト教協議会ドイツ委員会委員長、菊地純子先生をお迎えしました。テーマは「緊急事態が私たちに告げていること」で、聖書学者の立場から聖書に照らし合わせて考えるという興味深い内容でした。先生は放射線測定器を被災地に贈る、などの活動をしています。私たちが何をすべきか、ということについては、小さくても自分たちなりに関わってほしい、ということをお話になりました。

次に、つきしまキッズデイを運営し、震災直後から積極的に福島の方々に支援している榎原民佳さんから「支援活動とは？」というお話を伺いました。私たちは自分たちの勝手な思いで動きがちですが、被災した方々の

GFSのモットーは、「互いに重荷を負いなさい」ということです。原子力発電事故のもたらした問題から目をそむけず、辛い思いをしている方々に思いを馳せ、これからは何が自分たちにできるか、を考え行動してい

ちょっと聖書、ときどきユーモア (九)

1. 苦勞をともに

牧師「Aさん、あなたは奥さんと苦勞を共にしていますか」

信徒A「もちろんですよ」

牧師「それはよかった」

信徒A「だって、女房がいるから苦勞するんですから」

2. 叩けよ、さらば・・・

信徒「先生、イエスさまの言った“叩けよ、さらば開かれん”というのは本当ですか」

牧師「あなたが真剣に叩けば、きっと開かれると思いますよ」

信徒「でも、この前飲んで夜遅く帰ったとき、どんなに真剣に叩いても開けてくれませんでしたよ」

「お詫びと訂正」
夏号の「聖書を聞いて」において誤記がありましたのでお詫びして訂正いたします。
誤：神の隣在↓正：神の臨在
◇
◇
「司祭と語ろう」 「聖書を聞いて」は今号はお休みいたします。
次回クリスマス号
12月22日発行予定